

「キャンプ」

主任司祭 晴佐久昌英

キャンプの季節が来た。今年も小学生会と中高生会、それぞれのサマーキャンプがあるし、主任司祭は青年たちと二十年来続けている無人島キャンプに出かける。きっと今年も参加者は、キャンプという「小さな天国」で大きな体験をすることだろう。日常の生活を離れ、教会の仲間と合宿して味わう感動体験が、その人の信仰の原点となることだって珍しくない。

キャンプなんて若い人のもので自分にはもう関係ないと思い込んでいる人もいるだろうが、とんでもない。「神の国の目に見えるしるし」であり、この世の「小さな天国」であるキリストの教会は極めてキャンプ的な本質を持っているのであり、キリスト者であるならば誰もが様々なキャンプの可能性を拓くべきなのだ。

事実、イエスの三年に及ぶ福音宣言活動は、まさにキャンプ生活だった。町から村へ、時には荒れ野へと、大勢の弟子や協力者と共に移動する日々は、困難もあったに違いないが、旅の高揚と共同生活の喜びに満ちていたはずだ。ルカ福音書は、「多くの婦人たちも一緒だった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」と、報告している。

その喜びはイエスの死後、初代教会において花開く。使徒言行録にはこんな記録もある。「信者たちは皆一つになって、全てのものを共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた」。

ここには、それぞれの家庭をもちながら互いの家に集り、日常生活を営みながら教会という非日常を生きていくという、「旅する教会」の優れてしなやかな方法論が示されている。

高円寺教会の仲間達も、時には寝食を共にし、持てる物を出し合い、喜びと悲しみを共有し、祈りのうちに一層「小さな天国」を大きくする工夫ができるはずだ。例えば、各グループや地区会での「ミサを中心とした温泉旅行」でもなんでもいい。もっともっと、信じる仲間と一緒にいるキャンプ的現場を生み出して欲しい。